
えっ！？ 俺勇者になっちゃった。

文野志暢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

えっ！？ 俺勇者になっちゃった。

【Nコード】

N0488H

【作者名】

文野志暢

【あらすじ】

ある日、一人の保育士が物語の世界に迷い込んでしまう。そこで彼が見たものは…。

プロローグ（前書き）

童話の元ネタをいじってみました。

プロローグ

やあ、こんにちは。

あつ、もしかしたら「おはよう」「や」「こんばんは」の人もいるのかな？

まあ、いいや。

皆さん初めまして。

ボクは…

『ボク』という存在ができる前に消えてしまった物の1つだよ。

あはは。

意味が解らないって？

此処は物語の狭間。

物語って書き手によって、良くも悪くもなるよね。

で、その使わなかったネタが落ちてるのがここ。

だったら解るよね？

ボクはある物語の登場人物だったけど使われなかった存在。

この世界も面白いよ。

住めば都って感じ。

けどね、彼らにとっては違うみたい。

彼らは誰かって？

そりゃ内緒だよ。

でも、もつすぐ彼らによっておもしろいことが起きるらしいよ。

あつ、みんなが呼んでる。
行かなきゃ。

第1章

乙木皇オトギ コウと姫島玄ヒメジマ ゲンは図書館で本を読んでいる。

しかし、彼らが読んでいるものは全て子ども向けの本であった。

若い男が二人でひたすら子ども向けの本を読んでいる光景は少々異様である。

一冊また一冊と二人は周りにある本を読んでいく。

半分ほど読めた時、玄は疲れてきた所為か、本を読むのを止め、体を動かし始めた。

それに気付いた皇は彼に言った。

「玄、悪いな突き合わせちゃって。外の休憩所で休んできてもいいぞ」

元々この作業は皇一人で行うはずだったが、玄が手伝ってくれていたのだ。

「大丈夫だって。さすがに三、四時間ぶっ続けで本を読んで目が痛いけど」

玄は体を動かしながら、さらに言う。

「しかし皇、子ども好きで幼稚園の先生になったはいいけど大変だね」

皇は言った。

「まあな、子ども達の笑顔で疲れは吹っ飛ぶけど親が怖い」

「もしかしてテレビで騒がれているモンスターなにかって奴？」

「そんなところ…。この間も園児の父親におもいつきり睨まれた」

皇は明後日の方を見ながら言った。

それを聞いた玄はあることに気が付いた。

「なあ、その園児つてもしかして女の子？」

「ん？よくわかったな」

皇は驚いたが、玄は先ほど気付いたあることが仮定から確信に変わった。

「そりや睨まれて当然なんじゃない？父親が娘に言ってもらいたい言葉No.1を奪ったんだから」

玄は笑いながら言った。

「なんだよそれ」

皇は不機嫌そうに言う。

玄は思った。

（知らないのかコイツ…。『大きくなったらパパのお嫁さんになる（ハート）』という言葉を。大方、父親はパパの部分が皇になったやつを聞かされたんだな）

玄はじつと皇をみつめていた。

皇は玄からくる視線が嫌だったため、

「玄、いつまでボーツとしてるんだよ。さっさと後半分読んじまうぞ」

と言った。

玄は笑いながら謝り、本を読み始めた。

二人が本を読んでいると蛍の光が聞こえてきた。
それは閉館のアナウンスだった。

外はいつの間にか薄暗くなっており、図書館には人が少なくなっていた。

「げっ！？もうこんな時間。玄その四冊とこれ借りて出入口で待っててくれ」

慌てて皇はカードを玄に渡し、急いで本を戻しに行った。

普段から静かな場所である図書館だが、時間が違うだけで周りの空気が不気味になっている。

（さっさと本を戻して、借りた本をまとめないと）

皇は急いで本を戻す。本は二十冊ほどあるが、子ども用の本なので戻す場所はそれ程離れていない。

皇は残り一冊の本を戻すために、本棚の周りを小走りしていた。

その時、反対側の本棚から小さな光が見えた。

皇は誰かが忘れた携帯電話だと思い、反対側の本棚に行った。

しかし、光っていたものは別のものであった。

それは……。

本だった。

皇は声にならない叫びを上げ、本を持ったままカウンターまで全速力で走っていった。

いつの間にか持っている本は二冊になっていたが、皇は気付いていない。

司書と話している玄は驚いた。

何故なら本を戻しに行った友人が、ものすごい勢いでこちらに走ってくるのだから。

「すいません。これも追加で借ります！」

皇はカウンターに本をのせ玄からカードを奪った。

早く図書館を後にしたい皇は、司書の事務的な対応を聞き流し、終わったと同時に本を持って図書館を足早にでていった。

あまりの出来事にあぜんとしたが、玄は何故彼があんなにも慌てていたのか解らなかった。

しかし借りた本の殆どを自分が持っているため皇を追い掛けるしかなかった。

「待てよ!!」

玄は必死に走ったのでなんとか皇に追いつくことができた。

「見てない、見てない…。俺は見えてないんだ……」

皇は一人呟いている。

玄は心配になって声をかけるが、反応がない。

「……。返事しろって」

やっとのことで皇は玄に気が付いた。玄は皇に話を聞こうとするが、

「家で話したいから、ウチ寄ってって」

と言われてしまった。

皇は自宅についたら、先程の出来事を玄に話した。

「……。で、オマエは本が光っているのを見て、恐くなって逃げて、その上余分な本まで借りてきたってこと？」

と玄は言った。

皇は沈んでいる。

皇にとっては一大事、しかし玄にとっては作り話にしか聞こえない。

呆れ果てた玄は自宅に帰ろうとする。その時、皇が何か言った。

「何か言ったか？」

聞こえなかった玄は皇に聞き返すが何も言わない。

気のせいかと思った玄は帰ろうとするが皇がズボンの裾を離さない。

「……。」

両者無言の状態が続く。

しばらくして、根負けした玄が

「わかった。手伝えばいいんだろ」

それを聞いた皇の顔がみるみる明るくなった。

「よし、そうと決まれば早くこの六冊をまとめるぞ」

反対に

玄の顔は沈んでいたが…。

二人は早速作業に取り掛かろうとする。
ふと玄は気がついた。

「借りたのは七冊だぞ」

確かに本は七冊ある。

「あれ？五冊玄に頼んで、俺が持っていたのは最後の二冊だけ借りたハズなんだけど…」

と皇は言った。
しかし玄が、

「何言っているんだ。お前が持ってきたのは二冊だったぞ」
と言った。

よく見ると一冊だけ皇の見覚えのない本があった。

タイトルは『おとぎの国の大事件』。

中を見てもみるとおかしなことに、最初の一二ページしか描いていない。

そして図書館の本ならば必ずある物がなかった。

「コレ、バーコードがついていない」

皇はもちろんのこと、玄も本を調べた。

と、突然。持っていた本が宙に浮き光りだした。

二人は眩しい光によって前が見えない。

「どうなっているんだ!？」

「ギャー。ゴメンナサイ、ユルシテクダサイ!!」

それぞれの反応を見せる二人。

「勇者さま」

二人以外の声と同時に光はなくなったが、その代わり少年らしきモノがいた。

本は彼の手元にある。

彼の背丈や服装は子供だが、耳の先が尖って背中には羽がある。
尚且つ頭の上にはうさぎの耳と触覚が生えていた。

「誰だオマエ」

玄が聞く。

因みに皇は、キッチンの奥に隠れている。

頭だけだが…。

「僕はエリユって言うの。勇者さまを迎えに来たの」

少年 エリユが答える。

「勇者つて誰だ。そんなヤツ今時いないぞ」

尤もなことを言う玄。

「えゝ、そこにいるよお。ね、勇者さま」

エリュが指したのは皇だった。
玄はしばらく考えたが、

「皇、呼び出しだ。行つて来い」

とりあえず、隠れている皇を引つ張り出した。

エリュは持っている鞆から熊の耳を出し、ウサギの耳と取り替え、
でてきた皇を持ち上げた。

「さあ、勇者さま行きますよ」

皇は気付いたが時既に遅し。

自分より小さいエリュに持ち上げられ、本の中へ連れて行かれる
寸前だ。

「え！？説明無いの？ってか、拒否権も無いの！？」

皇は慌てて玄に捕まろうとするが、

「行つてらっしゃい。勇者サマ」

笑いながら避けられた。

次の瞬間、本は亜空間を開き、エリユと皇は吸い込まれていった。

そこには散らかった部屋と玄だけが残る。

「まあ、がんばれよ」

玄は一人つぶやいた。

第1章（後書き）

2ヶ月以上かかってしまった。
これからどうなるのだろうか…

第2章

本に入ったエリユと皇。

しかし、二人の周りは暗闇で何も見えない。

皇は未だにエリユに持ち上げられたままだ。

エリユは触角から光を放ち周りを明るく照らす。

（畜生、オレはどうなるんだよ）

皇は無理やり連れてこられたため機嫌が悪い。

そんなことを余所にエリユは進んで行く。

しばらく歩くと扉が見えてきた。

だが、ゲームやマンガとは違い扉というよりは普通のドアだ。

エリユは扉の前で皇を降ろした。

「着きましたあ。ココが世界の入口です」

「どこからどう見ても人んちの玄関なんだけど」

疑問に思う皇。

「いいの、いいの。さあ、勇者さまが思う様に扉を開けて」

とエリユは答えた。

とりあえず、皇はエリユの言う通り扉を開けた。

扉を開けると、

立派な城下町があった。

「え？」

咄然とする皇。

エリユはスキップをしながら進んで行く。

しばらくして皇を置いてきていることに気付き、

「勇者さま、早く早くう
と言った。」

皇は慌ててエリュに追いかけた。

皇は街中を歩いていると改めて自分のいる場所が異世界だと認識した。

お菓子でできた建物。高速で走る亀とゆっくり走るうさぎのおい駆けっこ。

ソファが動物の様に走っていたり、妖精がそこかしろに翔んできたりする。

もちろん、城下町なので日本髪を結っている女性やおかっぱきもいる。

彼らの場合、目が一つだったり、首が伸びたりしているが。

皇は前を見ずに歩いていたため何度も住人とぶつかっていた。

ぶつかった住人は皆、絵本でみた登場人物だ。

エリュは皇が目移りしてあっちへふらふら、こっちへふらふらといろんなところへ行ってしまうので、仕方なく担いで城まで行くことにした。

エリュと皇はやつとのこととで城に着いた。

城下町に建っている城なのだが、目の前にあるのは天守閣が立派な日本風のものではなく、遊園地にある西洋風のものだった。

城にはアリスに出てくるトランプ兵、くるみ割り人形を大きくしたものの、猫や犬などの動物が見回りをしている。

彼らは皆すれ違うエリュに挨拶をしている。

（コイツって実はものすごいヤツなのか？）

と、疑問に思う皇。

そんなこんなでいつの間にか、二人は大きな扉の前まできた。

エリュは一度扉の前で立ち止まり、

「この先に我が童話の国の王様がいますので、勇者さま、粗相の

ないようお願いしますねえ」

と言われてしまったので、皇はもちろん頷いた。

皇は内心とても緊張していた。なんせ、本の中とはいえ、今から一国の王に会うのだから緊張しない筈がない。

エリユは扉を二度叩き、

「王様。神官エリユ、外の世界より勇者を連れ只今帰還しました。」
と言った。

皇は王様に会う緊張とエリユの役職に驚いた気持ちが交差していた。

そして、慌てる皇を余所に目の前の扉は開いていく。

奥には、それはそれはとても美しい少年がいた。

少年はどこか儚く、優しさのオーラに包まれている。

「ご苦労様。さあ二人共こちらまで来て下さい。」

と王様は言った。

皇はまともな人だと判断して前へ進んだ。

しかしエリユは

「王様変ですよ。そのしゃべり方」

と、大爆笑。

皇は神官といえどそんな口調で話していいのだろうか慌てる。

「エリユのことは気にせず勇者殿、どうぞこちらへ」

王様はエリユを相手にせず皇に話しかけるが、エリユの笑い声が部屋に響く。

「お、おい。いいのか、そんなに笑って」

皇はエリユのことが心配になり、声をかける。

「え。だってえ王様が悪いんですよ。」

普段そんな話し方しないのに。部屋入った瞬間びっくりしちゃったあ。だってホントは超…」

エリュが最後の言葉をいい終わるか終わらないかのところで、エリュに向かって何かが飛んでくる。

それを軽々と避け、

「俺様なんですよぉ」

と言った。

「あゝ何言つてやがる！」

（王様キレました。ってか、ギャップありすぎだ。あんなに可愛いのに俺様…）

皇は1人ギャップに苦しんでいた。

何故ならエリュと王様は激しい攻防を繰り返していたからだ。

二人は城を壊す勢いで闘っているが城はびくともしない。

大変なのは唯一人で二人の闘いから逃げている皇だった。

「あの、すみませ〜ん」

おそるおそる、闘っている二人に声をかける。

やはり返ってくるのは返事ではなく、闘いの流れ弾ばかり。

それらを必死に避けながら声をかけていく。

「あーん」

やっとのことで王様が返事をした。

その時には、皇は疲れ果てていた。

「勇者さま。どうしてそんなにボロボロなんですう」

とエリユは聞いてきた。

王様は皇が闘いに巻き込まれたのがわかっているので、何も言わず魔法で皇の洋服や身体を治した。

「ついでに、コレもだ」

皇の頭を持って王様は言った。

皇の頭の中には小さな電流が走り、思わず目を閉じてしまう。

それをみたエリユが王様に文句を言おうとしたが、王様は言わせない。

皇は目を開けると、あまりの光景に驚く。

「えっ、王様。俺の目に何をしたんですか!？」

「あーん？ただテメエのしているものが幻だから回線いじった」

と王様は言った。

エリユは皇の身に何が起きているかわからない。

「王様、勇者さまに何したんですか!!勇者さまあ、大丈夫ですかあ？」

「うう、ちょっと気持ち悪いけど大丈夫だから。
今まで見ていた景色と全く違うから驚いた。それで俺は何をすればいいんですか？」

と皇は言った。

王様はやっと今の皇の状態を理解した。

「通りで幻の景色をみてたわけか。まったく、説明無しに連れてくるじゃねえよ」

エリユはまだ疑問が残っている。

「えゝ。だって勇者さまを見つけたらすぐ連れてこいって王様が言
ったじゃないですかあゝ」

文句を言うエリユ。

王様は呆れながら言う。

「神官であるお前がなぜわからない。こちらとあちらはあまりにも
世界が違う。」

だからあまり影響を受けない、お前に勇者を迎えに行かせた。
だが勇者は違う。多かれ少なかれ、影響がでてくるんだ。」

エリユは納得し、皇に謝った。

皇は自分に起きていた事がなんとなくわかったが、疑問が残る。

「じゃあ、俺が今まで見ていた景色はなんですか？」

皇は聞いてみた。

「あれは、勇者さまの頭の中で想像した世界だよ。」

とエリユが言った。

その言葉を聞いた皇は、沈んでしまった。

（なんつーもんを想像してんだよ、俺）

「要は、変なもん見えてると夢見すぎだというのがわかるな」

と王様は皇に追い討ちをかける。

「だが、それだけで済んだってことは、勇者になる素質はあるからな」

と王様は続けた。

皇は不安になったので聞いてみた。

「じゃあ、視覚だけでは済まない場合って…」

「一番危ないのは狂っちゃうことですかねえ」

皇が最後まで言い終わる前にエリユが答えた。

皇はショックで言葉がでないため、エリユは固まった皇を見て慌てている。

「エリユ、お前ちょっと落ち着け。勇者、本題入るからちゃんと聞け」

と王様は言った。

二人は落ち着いて王様の話を聞くことにした。

「勇者、お前からみてこの世界は本の中だ。本といっても童話の国だな。」

俺様はこの世界の王でエリユは神官だ。

この国の住人は様々な童話や絵本の登場人物になるんが、最近不思議なことが起きるようになった」

「不思議なこととは？」

皇は質問した。

「ああ。元々童話の国の住人とは別に存在していた住人が国で暴れているんだ。本来ならエリユ一人でどうにかなるんだが、この世界の掟で『世界に異変が起きた時、異世界から勇者を呼びこの世界を救って頂く』という面倒なもんが存在してな。つつつ訳でお前が呼びだされたってわけだ」

と王様が言った。

「は、はあ」

皇は、あまりの話に相槌を打つだけになってしまった。

「大丈夫ですよ。僕も着いていきますから」

とエリユは言った。

皇はしばらく考えた後

「わかりました。その話お受けします」

と言った。

エリユは

「それでは早速準備してきますねえ」

と言って王室を出ていく。

皇は思い出したように王様に聞いた。

「一つお聞きしたいんですが、初めて会った際に何故あのような口調だったんですか？」

「ああ？あれはただの外面だが、エリユが知らないのは本来出席する筈の公務をサボっているからだ」

と王様は言った。

「……なるほど」

皇はエリユが王様にかなり迷惑をかけているのがわかった。

皇は王様にこの世界の事を聞いていたら、エリユが戻ってきた。

「只今戻りましたあゝ。準備は整いましたよう」

「ご苦労エリユ。今日は陽も暮れているから明日の朝出発すればいい」

と王様は言った。

「えっ、俺明日も仕事あるんだけど」

と皇は慌てて言った。

「こちらとあちらの流れは違うから大丈夫だ」

と王様は言い、さっきの話聞いていなかったなと皇を睨んだ。

皇は王様に謝り、客間に案内された。

皇が城に入る時丁度城内に不振な影が忍び寄る。

「まあ、なんと、なんと。勇者なんぞを喚びだして、急いで忌々しい小娘に……」

と、突然、不振な影が履いている靴が光りだす。

「あつ、熱い熱い。や、止めておくれ。急いで伝えにいかねばあゝ」

影の靴は熱せられたのか、とても熱い。

影はブラックホールのようなものをだし、中へ入っていった。

第2章（後書き）

第2章書けました。

王様あんな性格ではなかったんですが、ものすごいことになりました。

果たして最後に出てきたのは誰でしょう…

第3章

チュンチュン、
チュンチュンチュン。

皇は外の眩しい光によって目が覚める。
ただ実際のところ目は開いてはいるが、頭は回っていない。

ドドドドドドドド

部屋の外から間の謎の音が聞こえてきた。
どうやら音の主は皇の部屋に向かってきている。

と、皇の部屋のドアが勢いよく開く。

「勇者さまあゝおはようございますー!!」

部屋に来たのはエリユだ。

「おはようゝ。朝から元気だな」

皇は目をこすりながら挨拶をする。
皇は昨日のうちに準備された服に着替えようとする。

「キヤー」

エリユは顔を伏せて部屋を出ていく。

皇は少し疑問に思ったが服を着替えた。

皇は着替えて部屋を出たところにエリュはいた。

「何で出て行っただ？」

皇はエリュに聞いたが答えなかった。

皇もまあいいかと思い、深く追求せず二人は王室へと向かった。
王室へ行く間に幾人かの家臣とも会ったが、昨日の様には驚かなかった。

王室につくと王様は玉座に座っていた。

「おう、テメエら早速だが行って来い」

「ところで、どこに問題の住民がいるんですか？」
と皇は尋ねた。

「あ？適当に歩いていれば会えるだろ。
だからとつとと行け」

皇とエリュは王様が言った途端に突風に襲われ、
城の外まで飛ばされた。

『言い忘れたが右目を隠すと偽りの姿が見える。
エリユなら殆どの敵は一人で倒せるから、
問題のやつらがでてきても下手に手を出すんじゃないぞ』

と、王様の声が頭の中に響いた。

「さてと、気を取り直して出発するか」

と、皇は言って二人は出発した。

二人は周りに聞き込みをしながら進んでいるが、
手がかりは手に入らない。

(問題の奴ら探さないとずっとこの本から出られないんだよね…)

皇は手がかりが見つからないので不安だった。

「あ、勇者さま危ないですよ」

皇はエリユに押されてこけてしまう。

「っ危ねえな。なんだよこれ!？」

皇のいた場所には大きな亀裂があった。

「お主等があの方を狙う悪い奴等だな？
この坂田金時様が退治してやる!!」

二人の前には坂田金時と名乗る斧を持った男が立っていた。

金時はもう一度斧を振り下ろし攻撃してくる。

エリユは簡単に避けれるが皇はそうもいかない。

やはり三回に一回は攻撃をくらいそうになる。

危ないと判断しエリユは皇を連れて岩の陰に隠れる。

「なあ、あれが問題の奴なのか？」
と皇は聞いた。

「アレは違いますよう。あれは只の影が薄い主人公です」
「はあ!？何の話？」

皇は金時が何の登場人物か解らず驚いた。

皇が考えているのをみていた金時が痺れをきらした。

「ああ、どうせ俺は影が薄いよ。ああ薄いさ。
勇者の癖に俺のことが解らないのか！？
歌だつてあるんだぞ！」

「つてか、俺は歴史上の人物でもあるぞ！
他の奴らと一緒にするんじゃないねえ！」

金時は叫びながら、二人に攻撃をする。その攻撃により道にたくさん亀裂ができる。

（あゝめんどくせえ）

ふと避けながら皇は考えていた。

すると

「ていやっ！」

エリユが金時に岩を投げていた。
そして皇に向かって言う。

「あんまり話長いんでえ、厭きちゃいましたあ」

皇はエリユにお礼を言って二人は先へ進んだ。

（『あの方』って誰だ？この件のラスボスだよな。手がかりが少な

え……)

皇は考えていた。金時についても謎が多すぎるが、一刻も早くこの事件の犯人が知りたかった。

「なあ、金時が言っていた『あの方』って心当たりあるか？」

皇はこの世界のことはエリユが詳しいだろうと思い聞いた。

「……解らないですう」

「そうか」

エリユもわからない相手とわかった皇はまた考え込んでしまった。

(彼らについて言葉にしたら存在を認めることになるから言えないのですう。ゴメンナサイ)

皇はエリユがこんなことを考えているとは思ってないだろう。

ゴゴゴゴゴゴ

二人の後ろから地響きが聞こえてきた。

「何なんだ!？」

見てみると岩が皇とエリュに向かっていてる。

「どらあああああ!」

なんと岩の後ろには金時がいた。

「よくも無視してくれたなあ!」

岩を押しながら金時が叫び二人に向かっている。
しかし、皇とエリュは道の端に寄った。

ガッシャー

金時はそのまま木にぶつかる。

「なんだったんだ?」

皇は呆れている。

「さ、流石は勇者と神官だな…。ならば一本勝負の相撲で決着をつけるか」

「僕を倒せませんよう。べー」

エリユはやる気だ。

「ハッ！！勝負は決まったも同然だ。」

金時は相撲に自信があるみたいだ。

エリユは熊耳カチューシャをつけて準備している。

（エリユは大丈夫だな。あれ？金時…相撲…？）

皇は少し気になっていた。

一方エリユと金時は相撲を始めていた。

両者一歩も譲らない。

そこへ金時が技をかけてきた。

エリユは転けそうになるがこらえて技をだす。

「とりゃああ」

金時はそのまま投げ飛ばされ空へと消えていった。

「飛ばしすぎちゃいましたあ」

「ありがとな」

勝負はエリユの勝利で終わった。

二人はまた先へと進んでいく。

「あつ、坂田金時つて金太郎かあ」

皇は思い出せたことにホツとする。

「やっぱり影が薄い主役ですう」

エリユは笑っていた。

「た、助けて」

前から誰かが走ってきた。

第3章（後書き）

第一の敵は「金太郎」でした。

ずっと前に某番組で落ちまで知ってる人が少ないってやってたので、最初から彼が出でくるのは決まっていた（笑）

次回は美食家&死体愛好家と対決！！

でなんの話かわかった人すごいかも

（2作品です）

第4章

逃げてきたのは一人の男性と三人の少年だった。
一番小さい少年が勢い余って皇とぶつかってしまふ。

「うわっ」

皇は少年と一緒に倒れてしまふ。

「ごめんなさいー!!」

少年は謝った。

皇は大丈夫と言ったが、少年を見て驚いた。

「どうしたんですかあゝ？勇者さま？」

エリュが尋ねる。

「なんでもない」

（つてえ……。右目閉じるんじゃない。やっぱり目の前に幼稚園児が豚のお面つけてるから驚いちゃう）

「で、何があっただんだ？」

と皇が聞き直し、男性は言った。

「オレ達は、『三匹の子ぶた』の子ぶたとオオカミです。先日、三男とそっくりな少年が現れオレらを襲ってきたのです。その為三人を守りここまでできました」

少年　子ぶたは三人で寄り添っていた。

「兄ちゃんハラ減ったよ」

一番小さい少年が言い出した。

「我慢しろ。皆お腹は空いてる」

「でも兄貴、オイラもお腹空いた」

一番上の少年が注意するが、二番目の少年も空腹に耐えられないようだ。

ぐううう。

と誰かのお腹が鳴った。

「兄ちゃんのお腹鳴ったよ」
と弟が笑っている。

皇は荷物から飴を四つだし、四人に渡した。

飴を貰った一番目と二番目の子ぶたはとても喜んだ。
だが、三番目の子ぶたはまだ足りないみたいだ。

「どうした？ 飴ならまだ沢山あるぞ」

と、皇が言う。

しかし三番目の子ぶたは首を振った。

「ううん、飴一つじゃ足りないからね、僕が食べたいのは……」

突如、子ぶたの手には、身丈程あるナイフとフォークが現れた。

「何時の間に!？」

オオカミは驚き、子ぶたは隠れる。

「兄ちゃん達みーんなだから」

と、三番目の子ぶたが言ったと同時に皇達は逃げていく。

皇とエリュ、それにオオカミと二匹の子ぶたはなんとか三番目に子ぶたにそっくりな少年から逃げる事ができた。

「おっちゃん、三男はどこへ行っちゃったんだ？」

と二番目の子ぶたがオオカミに聞いた。

「わかんねえ。無事だといいんだが……。エリュ様お願いです、助けて下さい」

オオカミは言ったが、エリュは黙っている。

しばらくして皇はエリュに言う。

「なあエリュ、この事件が俺達が探している手がかりに繋がると思
う。」

（『三匹の子ぶた』とあの少年。繋がるものは……。あれ？）

皇はふと気になった。

「さっきぶつかったのはどっちだ？」

皇は聞いた。

少年は不思議そうに言った。

「何言ってるの？ぶつかったのはアイツだよ！」

「あつ、悪いな」

と皇は言った。

皇はまだ疑問が残るようだった。

しかし、他の皆は気付いていなかった。
それよりも三男を探す方法を考えていた。

「おお、貴方は！！」

そこへ一人の青年がやってきた。

彼の服装は王子のようなものだった。

そして彼は皇のもとまで行き跪いた。

「おお、貴方は何故そんなに美しいのだ？是非とも我が城に招待しよう」

エリユは王子らしき人と皇の間に入り、

「貴様は誰だ！？どの物語の王子だ？」

と、聞いた。

それを見たオオカミと子ぶたは驚く。

エリユは神官だ。見たことない住人はいる筈がなかった。

皇は先ほどの少年と王子には同じような感覚に気が付く。

「だめええええええええ」

と、誰かの声が響く。

「王子様ダメですよ。兄ちゃん達は僕の獲物ですよ」

それは先ほどの少年だった。

皇達は少年と王子に挟まれてしまう。

「一人位いいじゃないか。彼は是非とも我がコレクションに加えた
い」

と王子は皇を指差したが、少年は首を振った。

「最初に見つけたのは僕ですなので、全て僕の取り分です！！」

少年の言葉を聞き、オオカミと子ぶたは怯える。

しかし、エリユと皇は考えていた。

「お前は欲張りすぎだ。我が一人貰ってもお前には四人いるだろう。さあ我が城へと行きましょう」

王子は皇の手を取り行こうとした。

「ま、待て」

「勇者さまを離せ!!」

「王子様、だからソレは僕の獲物!!」

皇、エリユ、少年はそれぞれの反応を見せた。

「なあ、待て。俺はお前に連れていかれたらどうなるんだ？」

皇は慌てて王子に聞く。

「我がコレクションの一つとして城に飾っておくぞ」

王子はさも当然のように答えていたが、少年は不満そうにし王子を蹴った。

「イタっ!!」

王子は少年を睨む。

今度は王子が少年を蹴った。

「痛い!!」

両者共に睨み合い、暫くすると二人は皇達の事を忘れケンカを始めた。

「今です！逃げますよー！」

とエリユが言い、皇達はその場を離れた。

五人がその場を離れてから随分と時間が経った時、

「あつー！！兄ちゃん達がいらない！！」

と少年が気付いた。

「何！？ホントだ。貴様の所為で彼らを見失ったではないか」

「そっちこそー！！僕の獲物だったんですよ」

「こうなったら、先に見つけた者の取り分だー！！」

そして少年と王子は去っていった。

一方皇達は王子と少年から逃げ切り、レンガの家に隠れていた。

「ここにいればひとまず安全です」

とオオカミが言った。

二匹の子ぶたはエリユと皇にお茶を出している。

「エリユ、さっきの二人こそ今回の敵になるんだろ？どうやって倒すんだ？」

と皇は聞いた。

「はい、倒す方法なんですが……」

エリユは言葉を濁す。

「どうやるんだ？」

皇がもう一度聞いた。

暫く沈黙が続く。

かなりの時間が経った後エリユは重い口を開いた。

「まず、彼らについてなんですが、僕の口からは言えないです」

その言葉によって皇達は驚いた。

エリユは話を続ける。

「理由は、こちらの住人が奴らについて話したことで奴らのことを認める事になります。奴らは本来ならばこの世界にいてはいけない存在なので、存在を認める事によって奴らは強くなってしまうのです」

と言った。

「じゃあ、倒す方法はないんですか？」

とオオカミが言う。

それに続いて子ぶたは弟が無事なのかと聞いた。

エリユは自信が無さそうに続ける。

「奴らを倒す つまり元いた場所に戻す方法が一つだけあります。

その方法は『彼らの名前を異世界の勇者が叫ぶこと』だそうです」

皆無言になる。

エリユ達は王子と少年の正体が解つても皇に伝える事ができない
為とても辛い位置にいた。

しかし皇だけは違う。

「大丈夫かもしれない」

エリュ達は皇を見る。

「俺、あの二人の正体分かったと思う。只、万が一奴らの名を間違えた場合はどうなるんだ？」

と皇は言った。

しかし、エリュはわからないと伝えた。

ドンドンドン

誰かが家に訪ねてきたようだ。

皆に緊張が走る。オオカミは皇とエリュに確認し平然を装い、

「どちら様ですか？」

と言った。

だが、外の人物からの返事はない。

皇は周りを確認しドアを開けたが誰もいなかったたのでドアを閉めた。

まだ皇達の緊張の糸が途切れない。

コトッ

天上から埃が少しずつ落ちてきた。

「もしかして！！　みんな逃げて！！」

長男の子ぶたが叫んだ。

皇とエリュも同じように気付き、オオカミ達を先導する。

注意深くドアを開け、皇達は外に出た。

すると

「やっぱりいたんだ」

目の前には先程の少年がいた。

ボタン

誰も居ない筈の家からドアの開く音がした。

「貴様！！約束が違うではないか！！」

家から出てきたのは煤塗れの王子だった。

「王子様誘導ありがとうございます」

と少年は嬉しそうに言った。

しかし、王子は少年を睨んでいる。

少年と王子が言い争っている間、皇達は小声で話していた。

「なあエリュ。いつアイツの名を叫べばいいんだ？」

「勇者様すみません。古文書には『名を呼ぶ』ことしか書いてなかったんです」

とエリュが残念そうに言った。

皇は大丈夫だと言う。

（しかし困ったな……。エリュ達に聞く事は相手を強くする。それにヒントを与える事もお互いに無理か。しょうがない、やってみるか！！）

皇はエリュ達に離れておくようにと伝え一人王子達の傍まで行き叫んだ。

「三匹の子ぶたの三男！！」

ピタッ

皇が叫んだと同時に少年は動きが止まった。

「なんと、彼の名を知っていましたか」

王子は驚いた。

もちろん、子ぶたとオオカミも驚いている。

少年の周りを見ると黒い沼が出来、少年は沼に沈んでいった。

「王子もココまでですね」

と、突然現れた背の低い髭を伸ばしている男がいた。

「！？何故貴様がここにいる？」

王子は言った。

「このままですと、貴方まで使えなくなってしまうので迎えに参り

ました」

と男は言う。そのまま彼は王子の耳元で何かを伝えた。

「致し方ないな、この決着はお預けだ」

王子と男は先程少年が沈んだ沼のようなモノを出し去っていった。

その状況に皇達は無言になる。

「……だよ」

誰かが呟いた為、皆そちらを見る。

「……弟はどうなったんだよ!!」

泣きながら長男の子ぶたは叫んだ。

次男の子ぶたは泣いていて、オオカミやエリュ、皇は俯いている。

「……この決着さえついたらまた戻ってくるさ。だから家で待っていよう」

オオカミが言った。

子ぶたとオオカミは家に帰って行った。

皇とエリユはまだ出発しない。

「あの少年は解りやすかったとはいえ、勇者様すごいですう。」
とエリユは言った。

「まあな、あの子が出てくる本も知ってたから。おかげで正体は解らなくとも共通点は見つけれたから次の相手がきても大丈夫だ」
皇の言葉を聞き、エリユも安心してゐる。

そして二人は道を進んだ。

第4章（後書き）

お久しぶりです。

難産でした（泣）

時がたちすぎてキャラの性格忘れかけたし…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0488h/>

えっ！？ 俺勇者になっちゃった。

2010年10月26日07時48分発行